

第2回未来産業創造会議における構成員の発言要旨

1 スタートアップ

- スタートアップが来るかどうかは、市がどういった支援をするのか、メインとなる大企業があるのかが重要なポイント。
資金の支援は単発ではダメ。コーポレートベンチャーとの繋ぎを市が担うようなことが必要

- ソフトウェアには人の集中が必要だが、それを北九州でやるのは難しい
- 一方、既存産業、歴史の古い会社の中には課題を多く抱えているところもある。リソースは十分にあるため、そうした既存産業の課題を解決することで新しいものを生み出していくとよい。レガシーな地元企業、アトツギ、スタートアップ等が混じりあって新しいものを生み出していくことが北九州の勝ち方ではないかと思う
- 成長フェーズに入ってくると、次に必要なのは人。人材派遣会社などに頼らなくても、求める人材が確保できるような支援があるとよい

- スタートアップの経営者として「売上になる仕事を得られること」というキーワードを提示させていただいた。スタートアップは成し遂げたい事業を実現するために、投資家から資金を集め、サバイブしていく必要がある。本業として売上が立つことが事業と組織を育て、投資家を魅了する、シンプルだが中長期的に効いてくる。そうした仕事があるところにスタートアップも集まるはずであり、これがいろんなことの接続点。
- 宇宙には現在明確なマーケットが存在せず、民需はこれから作っていかねばならない。北九州市にはそうした集積地を目指してほしい。

- 自社の業態では、専門性の高い人材にラボで勤務してもらう必要がある。そうすると、通勤圏内の人間しか雇うことができないが、そうした人材を集めることは難しいというジレンマがある
- 新しいものを生み出すには、理工系人材だけでなく、多様な専門性を持った人材が一か所で集められることが重要

- 国とのパイプ、事業の目利き、資金など既存企業が持つ経営基盤を活用して、スタートアップの振興を図るとよい

- スタートアップがどのような仕事をしていて、どういったところとマッチングできるのかといった情報が共有できれば、市や商議所でバックアップができる

2 中小企業振興

- 産業観光をキーとしたショールームでインバウンドを呼び込み中小企業の活性化を図ってはどうか。中小企業の技術や管理手法など、我々自身では自覚していないポテンシャル等を学びたいというアジアの人間もいて需要はある
- 経営基盤の強化を考えるとときに、大企業との人材育成の格差を感じている。中小の多くが技術やオーナーの魅力で成り立っているが、後継ぎをどうするか、技術をどうやって引き継ぐかが重要であり、そうした面の支援があるとよい

3 ビジネスインフラ

- 北九州のマーケットに興味はないが、ここは創業の地であり、全世界のトイレ文化発祥の地。そうしたモデルが北九州にあることが魅力
- グリーンなエネルギーで最先端のものづくりを世界に発信していこうとするなかで、インフラに目を向けると、北九州にグリーン水素がないことが残念。グリーン水素でなければの展開を考えていただきたい。
- DXをキーに考えた場合、製造業のまちを強みに、面白い製造業をつくってはどうかと考えている。洋上風力、自動車産業の集積などを活かせば、それに合わせたサービス業、ベンチャーなども集まる
- 大学経営のなかで、即戦力となる人材の育成を謳ってはいるが、企業でどういう人材が必要とされているかは十分に把握できていない
- 中小企業と連携しながら、カリキュラムを作成し即戦力となるロイヤリティの高い人材をその企業に供給できるようになれば、互いがウィンウィンの関係となる。人材育成という観点で学校への寄付や奨学金等のスキーム等もできれば、学生も集まる
- 中小企業で必要な労働力は外国人の活用も視野に入れるとよい
- 日本の自治体は金融政策をあまりやらないが、これは早いもの勝ちであり、是非力を入れた方がよい。海外の投資家や富裕層を惹きつけるような税制改革などを検討すべき
- 北九州だけではなく他都市でも人集めや企業誘致に取り組んでいる。ポテンシャルを生かして、他都市との違いをいかに施策の中心に据えていくかが大事

- I o Tを使った健康ビジネス、農業ビジネスといったものを特区でやってほしい

4 半導体

- 市のポテンシャル調査で重点分野は理解できるが、こうした分野を振興するにあたっての規制や弊害がどこにあるのかといったところまで踏み込むべき
- 大手半導体メーカーと話をしていたときに近々30兆円の投資をすと言っていた。彼らは巨大な工場を同じ敷地内に建て、それらをDXで繋ぎ一体運営することで生産効率を保とうとしている
- 要するに、今は工場を単体で誘致しても成立しない時代になっており、工場を集約する方向に動いていくということ。中心となる工場や産業がそこにあって、そこにみんなが集結するといった形がとれないと、これからの半導体は難しい
- また、前工程についてはある程度勝負がついたと思っている。ただし、製品としては後工程がなければ成立しないので、一貫した国内サプライチェーンを考えたとき政府は必ず後工程(中工程と呼ばれるものも含む)に資金を投入してくると予想される。後工程の中心がどこになるかは決まっていない。この後工程をいかに北九州に誘致するかは、ロビー活動にかかっている
- 国や政治家の考えや主張などの情報を上手く活用することが必要
- 後工程では巨大な工場は必要とせず、アプリケーション別に様々なことができ、広がり期待できる
- 北九州の特徴を生かして誘致する分野を見極めることは必要だが、前工程のTSMCの投資のような大きなものを持つてくる必要はない。
小回りが効く後工程の方が活性化と継続性に繋がる
- 前工程にもまだ可能性があると思っている。前工程、後工程、北九州にとって何が一番なのか考えてほしい

5 次世代自動車

- 自社では車のシート部品を製造している。対象がEVに代わってもシートは使用されるが、より軽量化に向けた取組が求められる
- 「北九州ではどこでも充電ができる」「EV関連の予算が日本一」などのセールスポイントがあるとよい

- タクシーを全てEVにするにはその分充電設備も必要。50基充電設備を入れようとするの変電設備が必要で、工場並みの電力となり規制の問題が出てくる。また、設備を昼間に一般開放しようと検討するも、**ここでも規制があり進めない。そうしたことの改善が必要**
- 安くならない限り一般には普及しない。自社では低コスト化を図るため、九電と実証実験に取り組んでいるが、こうした値段についてはEVを進める上で解決すべき課題
- 公用車をすべてEVにするなどのPR。国のEV購入補助（補助率1/4）に市が上乘せする、などに取り組んでいくべき**

6 宇宙・農業など

- 今週はタイミングが重なり、11/14に行われた北九州市の宇宙ビジネスセミナーや11/15に福岡市で実施された初の九州宇宙ビジネスキャラバンにもメインスポンサー・ネットワークキングの主催と、主体的に参加させていただいた。
- 未来産業創造会議の8つのテーマに於いて、宇宙は拡張余地巨大かつ集客力が高く、多方面にレバレッジが効くテーマであり波及効果が高いと捉えている。他方で時間がかかる対象であり、宇宙の利用価値を身近に感じにくいテーマでもあると認識している。
- そのため、**宇宙を広義で捉え、短期・中長期の両輪で展開することが重要。**宇宙といえば、**すぐにロケット開発や衛星等を連想しがちだが、もう少し広い視点に立てば、打ち手は多くある。特に、同じくレバレッジが効く人材育成とも相性が良い**
- 北九州には、
 - ・幼少期にスペースワールドに慣れ親しんだ世代や
 - ・単体衛星打ち上げ機数が世界一の九工大の存在
 - ・90年代に国際宇宙大学（フランス・ストラスブール）の候補地となっていたこと
 など、**国内で最も必然性を帯びる優位性を活かし、宇宙関連の人材が集まるリアルスペースワールドを目指していくべき**と考える。
- 衛星開発は今後も継続して伸びていく分野。現在の九工大の設備は50kg以下の衛星に対応したもので国内で最も汎用的で充実しているものだが、例えば、300kg以下に対応する設備を今後持つことができれば、日本に限らず、アジア、オセアニアから人が集う更なる一大拠点となれる。**誘致活動を行うのであれば、そうした設備関連は候補の一つだといえる**
- 人材育成の事例として九州工業大学と共に高校生・高専生向けの宇宙・衛星開発アントレプレナーシップ教育プログラムを既に開始しており、発展・横展開は可能**と考える。

- 食に直結する農業は重要なテーマ。自給自足し、地元ですべて循環できるようにしておくべきだが、現状クローズできていない
- 「農業」だからといって、農家に限るわけではない。太陽光発電事業者が、パネルの下で野菜を栽培する事例もあり、水、電力、日光、すべてを賄っている。そうしたコラボで自給自足する視点も必要
- 農業との親和性を考えるときに、一番ネックとなるのが土地の問題。牛を飼う、米や小麦をつくる、すべて一定の面積が必要となる。その点、IPS細胞を活用した培養肉や人工光合成であれば工場での製造が可能で、土地の少ない北九州にもマッチする。まだまだ発展途上の事業なのでチャンスは多い。
- また、エネルギーに関しては、核融合エネルギーが最近世界でも注目されており、国内では大阪大学で研究が進められている。未来産業というのであれば、そうした視点があってもよい

7 第3次産業

- あまり知られていないが、北九州は富裕層の多いまち。それは、証券会社等の支店が福岡市にもありながら、こちらにもあるということからも分かる。富裕層は2万人ほどいる。こうした富裕層の流出を防がなければならない
- 人口も90万人を超えており、空港や新幹線もある、こうしたことをアピールしていくべき。富裕層が住みたくなるようなフロリダ（若松）を見習ってはというのはそういう意味
- 高齢者にやさしいまちと言われているが、その実、富裕層が入居したくなるような介護施設や病院などは限られており、多くが福岡等に流れている。ホテルに関しても同様、富裕層が望むようなホテルは市内にない。この辺りを変えていかないと、入口のところで北九州は選ばれておらずもったいない
- 東京の人間と話をするとき、「こちらは食べ物がうまくて安い」という話をよく聞く。これは喜ぶべきことではなく、結局、付加価値を作れていないということを理解すべき
- 2万人の富裕層を動かすことは難しいが、2万人のうち100人を動かすことができれば、後は次第に追いついてくるという発想も必要

8 自由意見

- 北九州には素晴らしいゴルフクラブがたくさんある。しかし、そこに繋がるバスはない。第3次産業の振興として是非そこにも注力してほしい。
年会費も他所と比べ破格だが、もっと付加価値がつけられるはず

- 北九州は混雑のない道路環境や空港といったインフラ面の充実、食事などたくさんの魅力がある。第3次産業の育成では、そうした魅力を首都圏・海外に対しアピールし、大きなお金を落としてくれる層をターゲットに
していくことも必要

- 子どもにより教育を受けさせたくても現状はどこでも画一的な授業内容である。高度な教育が受けられるようになれば、そこを求めて高所得者も
集まり、いい循環が作れる

- 製造業が盛んな北九州では3交代が定着し24時間活用可能な労働力が
潜在的にある。これを活用すべき

- 市のポテンシャルがどこにあり、どう差別化するかがポイント。
例えば人材については、出産・育児で仕事を離れた女性や大手ものづくりメーカーを退職された経験豊富な方など、専門性の高い潜在的労働者が市内に多くいるように見受けられる。このような方々が市内に多くいることも、未来産業を興す、もしくは関連企業を誘致する上で、差別化ポイントになるのではないかと。
教育に関しては、仕事に子連れで移動する際、気がかりなのは授業の遅れ。徳島県の事例のようにリモートで教育が受けられる環境になるとよい

- 現状をブラッシュアップして、「子育てしやすいまち」「65歳以上に優しいまち」などを本当の意味で実現できれば人は集まる。健康で裕福な高齢者も集まる

- 教育に関しては、「神山まるごと高専」の取組を参考にするとよい。
高専に限らず、「高校版」「中学版」「小学版」などがあってもよい。
- 地方新聞や地方銀行は、地域情報の宝庫であり、ひとの意識や業界をまとめる力がある。そうした情報ネットワーク等を上手に使うことは一つのポイント

- イノベーションギャラリーを復活してほしい。実証の場と人が揃った良い施設であっただけに残念

- 「神山まるごと高専」は民間が中心となって立ち上げた格好のビジネスモデルであり参考とすべき
- 自治体だけで公教育を頑張るのではなく、官民が一体となり、理想的な学校づくりをする視点が重要

- 民間と行政の融合は絶対にやるべき。民間の方がスピードや効率の面では優れている
- 教育に関しては、人材育成のコンセプトを設けることが必要だと感じる。例えば北九州市＝「やんちゃな人材」というコンセプトで仕掛ける人材を育てるようなことも面白いと考えている。人が育つには時間がかかるため、域外からでも日本を代表する「やんちゃな人材」を呼び込み、集ってもらい、若者がそういう人たちに感化されるような環境づくりをするべき

- 若者を集めるため、ふるさと納税にアニメ制作をいれてはどうか
- 松本零士のイラストなどを名刺で使えるようにしてはどうか